

## 原爆投下についての意識と歴史教育

本稿では、1.広島・長崎への原爆投下に対する人々の意識、2.国家間での原爆への認識の違い、主に戦勝国であり現在も核保有国であるアメリカと、唯一の被爆国であり非核保有国である日本との認識の違いを「歴史教育」に焦点を当て、明らかにすることを目的とする。

本稿の内容としては、先行研究や調査を基に原爆への意識の違いを国家・年代別に確認した後、原爆投下についての意識の形成と中学・高校での歴史教育の関わりを考察するために、実際に日米の歴史教科書にどのような記載があるのかを分析した。また、アンケート調査を作成し収集することで、個人の主観に基づいた原爆投下についての意識と歴史教育の関連性を調査した。

日米の歴史教科書の分析では、日本の教科書は出版社によって記述内容に多少の差はみられるものの、発行年度によっては大きな差は見られず、内容は淡泊・客観的であり、起こった事実しか書かれていないことがわかった。一方アメリカの教科書は、出版社によって記述は大きく異なっていた。発行年度によっても記述内容に少しずつ差が生じ、現代に近づくにつれて、ディスカッションの題として原爆投下の賛否を学生に考えさせるものや、日本の単独統治・ソ連に対する誇示のためというアメリカによる利己的な思惑も記述されるようになったということがわかった。

アンケート調査からは、日本人向けアンケート結果の特徴として、比較的若い年代に「現実主義的」な考えを持つ人が多く、上の年代には「倫理的」な考えを持つ人が多いことがわかった。「社会」科よりも、「国語」や「道徳」「総合」といった原爆投下を知識としてではなく物語として扱っている教科の方が、強く生徒の印象に残っていることも明らかになった。歴史教科書の記述に対する印象は、「正当化・非正当化のどちらともいえない」が最も多い結果となった。一方外国人向けのアンケートでは、年代間による明確な差はみられなかった。歴史教科書の記述に対する印象は「正当化」「非正当化」「どちらともいえない」で票が分散しており、アメリカや中国などの複数人対象者がいる国でも、回答者によって「正当化している」と捉える人もいれば「正当化されていない」と捉える人もいることから、同じ国であっても地域や教科書、教師の教え方によって「正当化」の概念が異なるという可能性が明らかになった。